

「唐菖」考

——『冬の日』における野水の句をめぐる——

本 間 正 幸

笠ぬぎて無理にもぬる、北時雨

荷兮

冬がれわけてひとり唐菖

野水

(貞享元年刊『冬の日』「狂句こがらしの」歌仙^{〔1〕})

一

句意は、冬枯れを分けて前句の人が独り唐菖を採るとも、
或いは冬枯れの中に唐菖だけが青々としてゐるとも、両
様に解される。

(阿部正美氏『芭蕉連句抄』第四篇 明治書院 昭51)

阿部正美氏が示すように、従来この句の解釈は大きく二つ
に分かれている。すなわち「前句に詠まれる人物が冬枯れを
分けて唐菖を取る」とする説と、「唐菖」自身が冬枯れを分

けて生え出ている」とする説の二つである。

『冬の日』の古注釈に徴すれば、前者の解釈に立つものは
『的伝註解抄』(素丸著 年代未詳)と『七部婆心録』(曲斎
著 万延元年刊)の二つ。後者の解釈に立つものは越人の
『俳諧冬の日集権花翁之抄』(年代未詳)を始め、『冬の日附
合考』(魚潜著 天明八年序)・『冬の日句解』(關更著 寛政
六年刊)・『俳諧七部木槌』(素綾著 寛政七年刊)・『冬の日
注解』(升六著 文化六年刊)など多数にのぼる。

現代の注釈書に目を転じて、状況にさほどの変化はない。
前者の説に従うものは、管見の限りでは『校本芭蕉全集』第
三卷(富士見書房 平元)と新日本古典文学大系『芭蕉七部
集』(岩波書店 平2、上野洋三氏稿)の二つ。一方、後者
に関しては、幸田露伴が「語の理路より云へば、両解いづれ

も通ずれども、気味より云へば、ひとり唐菫の冬枯分けて存せりとする方勝れりとすべし²⁾」(『冬の日抄』昭20)とするのを始め、日本古典全書『俳諧七部集 上』(朝日新聞社 昭25)、日本古典文学大系『芭蕉句集』(岩波書店 昭37)、日本古典文学全集『連歌俳諧集』(小学館 昭41)、新日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』(小学館 平9)など多くの注釈書がその説に従っている。

『芭蕉連句抄』(前掲、以下『連句抄』と略称)の著者阿部正美氏も後者の説にくみしているが、同時に次のような疑問も呈している。

さて、さう見た場合、前句の風狂人を中心にして、打越の宗祇の清水もその人の場、この句も同じような場になつて、趣向の重複になる疑ひがないかが問題にならう。

氏の疑問は「自他場」の説から派生したものと考えられる。「自他場」とは「連句において、自分を主語に含む句を『自』、第三者を主語とする句を『他』、人情を含まない句を『場』として、三句のわたりを変化させるもの³⁾」であり、「自・他・場」の句がそれぞれ打越になるのを制したものの⁴⁾。先の句を含む一連を例にとれば、「冬がれ」の句を「場」の句と解釈すると、

しばし宗祇の名を付し水

笠ぬぎて無理にもぬる、北時雨

杜国(場)

冬がれわけてひとり唐菫

荷兮(他)

のように、「笠ぬぎて」の句を中央に前後がともに「場」の

句となり、「観音開き」になつてしまうのである。阿部氏はそれを危惧したものと考えられる。とすれば、『校本芭蕉全集』(前掲)・新古典文学大系『芭蕉七部集』(前掲、以下「新大系」と略称)はそれを避けるため、あえて前者の説にくみしたものであろうか。

それにしても、「冬がれわけてただ唐菫を」のように動作の対象を示す助詞があればまだしも、先の句形で上七を前句の人物の動作と取るのは難しいように感じられる。また新大系は『古今和歌集』卷一所収・光孝天皇の和歌を「君がため冬、の野に出て草をつむわが衣手は時雨に濡れつつ」(傍点、引用者)ともじつた諧諷と解しているが、これだけではなぜ無理に笠を脱いで唐菫を取らねばならないの理由が判然としない。したがって、普通に解釈すれば、ここは「観音開き」のそしりを受けようとも、後者のように「唐菫」自身が冬枯れを分けて生え出ている」と解するのが妥当であろう。実際、『冬の日』において式目に抵触した部分は他にもい

くつか見られるのである。たとえば、「炭売の」歌仙。同歌仙所収第三の句末は「花棘馬骨の霜に咲かへり 杜国」と「て留め」で結ばれてはいないし、「霜月や」歌仙の発句から第三に至る一連も同様。

田家眺望

霜月や鶴カウのツツイタならびゐて

荷兮

冬の朝日のあはれなりけり

芭蕉

檜ヒノ檜山家の体を木の葉ハ降

重五

こちらはまず発句がその句格ではなく、「て留め」で結ばれているし、脇の体言止めも「けり」と詠み流されている。さらに第三も「て留め」ではなく脇の句格・体言止めで結ばれているのである。

これ以外にも「狂句こがらしの」歌仙では発句から第三までの一連と、初裏五句目から七句目までの二箇所にわたって人倫の三句連続が見受けられる（式目上、人倫の連続は二句までとされる）。

・狂句こがらしの身は竹斎チクサイに似たる哉

芭蕉

たそやとばしるかさの山茶花

野水

有明の主水に酒屋サカつくらせて

荷兮

（「狂句こがらしの」歌仙、発句く第三）

・あるじはひんにたえしカライケ 杜国
田中なるこまんが柳落るころ

杜国
荷兮

霧キリにふね引人はちんばか

野水

（同、初裏五句目く七句目）

上野洋三氏5はそれを回避すべく第三の「主水」を人名ではなく「主水星」なる星の名に解しているが、当人自身、その呼び方に「この時代における一般性が確かめられ」ないと弁明するように、解釈としてはやはり無理があるように感じられる。

以上のように、『冬の日』には式目が遵守されていない部分がいくつか見られるのであり、「唐菖」の「観音聞き」も含め、読み手がその回避策を講じる必要性はないように感じられる。

また、当時の俳諧における「ひとり」の用例を見ても、
・月ひとり、稲荷の山のうすをたて 夕鳥

・捨られて猿の子ひとり叫声（延宝六年刊『大坂檀林桜千句』⁶）

・松マツ独トコ風友フユなはずし（和郎）わひ（和郎）わろ（延宝八年刊『是天道』⁷）

（延宝八年刊『投ネ不レ益』⁸）

・墓山、の雨松茸、のす、ごとくと独、、 杉風

(延宝八年跋『常磐屋之句合』第十七番⁹左)

など、延宝の後半以降は人間以外のものを主語にした例も散見される。それを踏まえれば、先の句も「唐萱」を主体化した句と見て差しつかえはないように考えられる。

むしろここで問題にしたいのは前句とのつながり方のほうである。先の句を「場」の句と取る注釈書の多くが、異口同音に「前句の場のあしらいであるが、時雨のわびをたのしむ孤高の詩人の匂いがうつつている」(日本古典文学大系『芭蕉句集』・前掲、以下「旧大系」と略称)・「この風変わりな人と物との間に、おのづから気趣感合する所があるのを見逃してはならない」(『連句抄』第四篇・前掲)と、後年の「句付」の萌芽を認めるかのごとくである。しかし、はたしてこの時期の野水にそのような句を意図的に詠むことができたであろうか。いま試みに『冬の日』から野水の「場」の句を任意に取り上げて示せば次のようになる。

① うぐひす起よ昏燭とほして 芭蕉
篠ふかく梢は柿の帯さびし 野水

② つゆ萩のすまふ力を撰ばれず

(「はつ雪の」歌仙) 芭蕉

蕎麦さへ青し滋賀楽の坊

野水

(「つゝみかねて」歌仙)

③ 花棘馬骨の霜に咲かへり 杜国
鶴見るまどの月かすかなり 野水

(「炭売の」歌仙)

④ 御幸に進む水のみくすり 重五
ことにてる年の小角豆の花もろし 野水

(「霜月や」歌仙)

右を見ると、いずれも前句の言葉に触発されてそれに相應しい景を付けたという印象のほうが強いの。たとえば①は「うぐひす」から「篠」を連想し、鳥の食い残した「柿の帯」が梢に残る山居の様子を詠んだものであるし、②は「萩」から同季の景物を連想し、蕎麦が青々と茂る秋たけなわの景を付けたもの。③は「馬骨の霜」として帰り咲いた「花棘」という、転生輪廻を思わせる句材に対し、千年も命を保つとされる「鶴」を持ち出したもの。同時に「霜」の降りる時刻として「月のかすかな」頃を思い寄せている。そして④も前句の「水のみくすり」から水不足を連想し、「小角豆の花」が脆く散るさまを詠んだものと推測される。いずれも前句の内容に「調和」した句作がなされていることはわかるが、「映発」す

るレベルに達しているかどうかは評価の分れるところである¹⁰⁾。

したがって、先の句も一見「句付」の先蹤と見なしうる句作になってはいたとしても、野水自身の作句状況に鑑みれば、それとは別の意図によって作られた可能性も考えられるのではない。以下、本稿では打越以前からこの句に至る流れを再確認しながら、この句に対する私見を示してみたいと思う。

二

まずは「冬がれ」の句から三句ばかり遡って本文を示すことにしよう。

- a ぬす人の記念の松の吹おれて 芭蕉
 b しばし宗祇の名を付し水 杜国
 c 笠ぬぎて無理にもぬるる北時雨 荷兮
 d 冬がれわけてひとり唐萱 野水

(「狂句こがらしの」歌仙)

付け筋を確認するならば、aは盗人の名を冠した松が風に吹き折られるさまを詠んだもの。bはそれに「名所」の句を向かい合わせたものであり、この二句の関係では両句とも

「場」の句と見て差しつかえはないであろう¹¹⁾。前者には「美濃国青野村一里塚の近くに熊坂長範物見の松」、後者には「美濃郡上郡山田の庄宮瀬川のほとり」にある「白雲水」と、具体的な地名を示した説(『俳諧七部搜』)も見受けられる。

しかし、これがb cの関係になると、bを必ずしも「場」の句と解釈しなければならぬ理由は存在しなくなる。むしろ「宗祇の名を付し水」を池辺・湖沼ではなく、宗祇が発句に詠み、その代名詞のごとく扱われた「水」、すなわち「時雨」の意に取りなした方が「名所」から離れ、展開はより大きくなるであろう。そのうえでcは宗祇を敬慕する詩人が旅の途中でわざわざ笠を脱ぎ、北時雨の洗礼に浴するさまを詠んだ句と取ればいいのである。ただし、談林俳諧において宗祇と言えは、「宗祇の蚊帳」の諺や「髭に香を焚きしめた」という故事を詠んだものが多く、時雨との取り合わせは必ずしも一般的ではなかったようだ。両者の取り合わせは「世にふるもさらに時雨のやどりかな」という発句を鸚鵡返しにした芭蕉の句、「世にふるもさらに宗祇のやどりかな」(『みなしぐり』「改冬」時雨の一連所収)の影響に拠るところが大¹²⁾きいのではないか。

そして問題のd。ここでの「時雨」はもはや宗祇の連想から切り離して解釈すべきであろう。また一句全体も前句に映発する景を詠んだというよりは、前句の「笠」を「冬がれ」のことと取りなし、人物が笠を脱ぐさまを、「唐萱」が息苦しい冬枯れを分け出て新鮮な北時雨に浴するさまに見立てた句と解釈すべきではないか。すなわち「前句で『笠』を脱ぐ人物に見えたのは、『冬がれ』を分けて生え出た『唐萱』であった」と見立てて転じた句と考えられるのである。

実際、『冬の日』には同じような付け筋の句が他にもいくつか見受けられる。たとえば、次の二例。

⑤ア 奉加めす御堂に金うちになひ 重五へ他へ

イ ひとつの傘傘の下下挙りさす 荷兮へ他へ

ウ 蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮 杜国へ場へ

(「初雪の」歌仙)

⑥エ 萱屋まばらに炭団つく白 羽笠へ他へ

オ 芥子あまの小坊交りに打むれて 荷兮へ他へ

カ おる、はすのみたてる蓮の実 芭蕉へ場へ

(「霜月や」歌仙)

用例は野水のものではないが、いずれも「他」から「場」へと転じており、cからdへの転じ方と共通する部分がある。

⑤のアイは「一本の大傘に何人かが入って寄進の金を寺院に運ぶさま」を詠んだものであるが、イウではそれが「大きな蓮葉の下で鷺の子が遊ぶ光景」に見立てて転じられている¹³⁾。

⑥もエオでは「炭団を搗く白を囲んで『芥子あま』の女兒と『小坊』の男児が入り交じって遊ぶさま」を詠んだものであるが、やはりオカでは「折れた蓮の実・折れていない蓮の実が交じり合った光景」に見立てて転じているのである¹⁴⁾。

逆に、「場」から「他」への転じにはなるが、野水自身にも同様の作例が見受けられる。

⑦キ つ、みかねて月とり落す霽かな 杜国へ場へ

ク こほりふみ行水のいなづま 重五へ場へ

ケ 齒朶の葉を初狩人の矢に負て 野水へ他へ

(「つ、みかねて」歌仙)

キクは時雨の晴れ間から差し込む月を稲妻に見立てたもの。これもクケでは、「氷を踏み分けて『稲妻』が走り去るかと思えたのは、齒朶の葉を胡籙やぐらに挿して勇ましく駆け抜ける初狩人の姿であったことだ」と人物に見立て替えて転じたものにほかならない¹⁵⁾。これらの用例に照らし合わせれば、dもまた前句に詠まれた旅人の姿を「唐萱」に見立てた句と見て支障はないように感じられる。

問題は、なぜただの「芭」ではなく「唐芭」として表出されたかという点にある。『和漢三才図会』（寺島良安著 正徳三年刊）に「葉菘葉ノ如ク、又萬芭ニ似テ皺マズ、白汁無キヲ異ト為ス」とあるように、本来「唐芭」は「芭」とは別の植物であり、「四時之有ル故ニ『不断草』とも呼ばれる」とのこと。しかし、「冬がれ」に對置されるみずみずしい植物を詠むにあたり「唐芭」を選んだ理由は、単に五音の制約を充たすためだけだったのだろうか。むしろそこに何らかの寓意が託されていたとは考えられないか。

結論から先に述べれば、「唐」の一字は「唐風狂いの芭蕉」を想起させるべく持ち出されたものと推測する。この時期芭蕉が漢詩に影響を受けた句作を多く残したことは周知の事実であるが、阿部正美氏は『連句抄』第三篇（明治書院 昭49）の中で、『みなしぐり』（其角編 天和三年刊）において芭蕉が一座した連句に、すべて漢詩の一節を取った前書きが付されているという事実を指摘する。氏はそこに「唐風狂いの詩人」を演出しようとする編者・其角の意図を読み取っているのである。

さらに其角との関係で言えば、同書の次の付け合いにも、この句への影響を見いだすことができよう。

芭蕉あるじの蝶ツグ見よ
腐クサたる俳諧犬もくらははずや
（其）角
（芭）蕉

前句の「蝶」は莊周の「胡蝶の夢」などの連想から、漢詩・漢文的世界の象徴として持ち出されたものであろうか。芭蕉はこの時期、他にも、

蝶よ〜唐土のはいかい問む

起きよ〜我友にせんぬる胡蝶
（天和年中作、真蹟自画賛）

（天和年中作、元禄五年序『をのが光』所収）と「蝶」に呼びかけた発句を残している。芭蕉の中で「蝶」は句作の教示を仰ぐべき「友」として意識されていたものであろうか。

芭蕉の自筆懷紙（『芭蕉全図譜』岩波書店 平5）では前句の「丁ツグ」の部分に「叩ツグ」の表記が宛てられている。ここでそれとは違った表記が取られているのは、版行に際し、其角が「伐木丁ツグ々トシテ音更ニ幽ナリ」（杜甫「題張氏隱居」その一）等の漢詩を想起させるべく表記を改めたものであろうか。「蝶」といい「丁ツグ」といい、いずれも「唐風狂いの芭蕉」を演出するための小道具と見ていいように感じられる。

付けるに芭蕉は「腐^{クサ}たる俳諧犬もくらははずや」と内面を吐露した句で応じている。ここでの「犬」も食らわぬ「腐^{クサ}たる俳諧」とは談林の旧態依然とした俳諧、もしくははその影響から脱しきれない自らの俳諧のことにほかならないであろう。芭蕉は莊子や杜甫を友としながら新風の開拓へと向かうべく決意を固めているのであろう。そしてその姿はdに詠まれた「冬がれ」を分け出る「唐莖」のさまに通い合う要素を持つと言えよう。「冬がれ」とも言うべき「腐^{クサ}たる俳諧」をかき分けて新風を模索しようとする若々しい唐風狂いの詩人……。「唐莖」に寓されているのはまさにその姿であったのではないか。

実際、野水は「霜月や」歌仙でもこれに類似した内容の句を詠んでいるのである。

春のしらすの雪はきをよぶ

重五

水干を秀句の聖わかやかに

野水

一句は水干を着用した秀句の達人が初春の句会を催すに際し、使用人に古い雪をかき出させるさまを詠んだもの。句中に詠まれる「雪」は軒下などに残った旧冬の雪と見るべきであろう。春の雪は淡く、積もってもすぐ溶けるといふ印象が強い。『山の井』（季吟著 正保五年刊）は「こそ雪」で春

の季語とする。また「水干」を着けた「秀句の聖」。その姿は「冬の日」第一歌仙の発句で自ら「狂句こがらしの身」と詠んだ芭蕉自身の姿を彷彿とさせる²⁰⁾。その「わかやか」な姿は「不断草」と異名を取る「唐莖」の姿にも通い合うと言えよう。また、句中に詠まれる古い雪を掻き出す作業、この句ではその主体こそ「秀句の聖」ではないものの、古い雪に「腐^{クサ}たる俳諧」と同じような意味合いをもたせるならば、これもまた「冬がれ」を分け出るさまに通い合う行為として位置付けられよう。

さらに、そのような視点で振り返るならば、前掲⑦のクケにも同様の構造を見て取ることができる。新大系（前掲）のように前句の「氷」を「旧冬の名残」と解するならば、そこに古い雪と同様「腐^{クサ}たる俳諧」の意味合いを読み取ることのできるし、それを踏み割って勇ましく駆け抜ける「初狩人」の姿に、新風を求めて「狩」に向かう風狂詩人の面影を重ね合わせることのできるであろう。『改正月令博物筌』（洞斎著 文化五年刊）に「雪霜にもしほれず青きものなれば、春の祝ひに用ゆるなり²¹⁾」とあるように、常緑を保つ齒朶は「不断草」と異名を取る「唐莖」にも通い合う要素をもつ。また、その葉を矢の代わりに胡籙^{なぐ}に挿した風変わりな出で立

ちは、木枯らしに吹き散らされた山茶花を笠に受けた芭蕉自身
の姿をも想起させる。

そもそも野水は、芭蕉を迎えるに際し、

⑧ 狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉 芭蕉

たそやとばしるかさの山茶花 野水

（「狂句こがらしの」歌仙、発句・脇）

と、その出で立ちを賞賛する一方、すべてを擲つて風狂に投
じきれない自身の境遇を「袴」に託し、次のように慨嘆する
のである。

おもへども壮年いまだころもを振はず

⑨ はつ雪のことも袴きてかへる 野水

（「はつ雪の」歌仙、発句）

両句は出で立ちの違いによって境遇の違いを表したものに
ほかならない。とすれば意表をつく「初狩人」の出で立ちは
水干をまとった「秀句の聖」同様、風狂世界に生きる者のそ
れと解さねばならないであろう。以上の例から帰納すれば、
野水が作中に芭蕉の姿を寓する場合、《「生命感溢れる若々し
い存在」（＝唐菖・水干姿の秀句の聖・菌朶の葉を胡録に挿
した初狩人）が「旧套」（＝冬枯れ・古い雪・古い氷）を
「廃し」（＝かき分け・掃き捨てさせ・踏み割つて）、新しい

ものへと向かう」という類型に託して詠む傾向の強いことが
看取されよう。

また、これらの句から野水の芭蕉に対する傾倒の深さを伺
い知ることできる。おそらく、野水はこれ以前に刊行され
た蕉門の俳書にも目を通し、芭蕉および蕉門への想いを篤く
していたと考えるべきであろう。

たとえば、『冬の日』の、

恋せぬきぬた臨済をまつ ばせを

秋蟬の虚に声きくしづかさは 野水

（「はつ雪の」歌仙）

この付合は、『武蔵曲』（天和二年刊）の

張雀鳴子くくにおどろきて 麩疇

無情^レ人秋の蟬^ハ 嵐蘭

（「錦どる」百韻）

に類似した表現を見いだすことができるし、同じく『冬
日』の

霧下りて本郷の鐘七つきく 杜国

ふゆまつ納豆た、くなるべし 野水

（「炭売の」歌仙）

もまた、『俳諧次韻』（延宝九年刊）の次の付合に類似した表

現を見いだすことができる。

霜カクバシ下アて更行里カクバシの粥カクバシ配

(其)角

寺々の納豆ナトウの声。朝アサハハハ。

(才)丸

(「春澄にとへ」百韻)

前掲⑧⑨も同様。⑨は『みなしぐり』の、官を辞し紙衣姿

に身をやつすさまを詠んだ芭蕉の句、

琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし

一品

朝アサにヒほしをふるふ紙衣

芭蕉

(「花にうき世」歌仙)

を踏まえ、先述したようにそれとは逆の生活を繰り返す我が

身を嘆いたもの。付句の「朝」は朝廷、⑨の前書きにも見ら

れる「衣を振る(ここでは「ゑほしをふるふ」)は「官を辞

して野に下る」(『日本国語大辞典』)意を表す慣用表現。

そして⑧も、「詩人玉屑」所収「閨僧可土僧ヲ送ル詩」の

言葉を裁ち入れながら、落花を踏みしめて惜春の情にひたる

風狂人を詠んだ『みなしぐり』の

うき世に泥む寒食の瘦

(其)角

杳は花貧重し笠はさん俵ズ

(芭)蕉

(「詩あきんど」歌仙)

を踏まえ、「今は冬のこととて、落花ならぬ山茶花の花片を

身にまどっていることだ」と戯れたものであろう。「たそや」

という問いかけには同集所収芭蕉の発句、

憶オモ老ラウ杜ト

髭風ヒゲカゼ吹て暮ス秋歎アキノナガメ誰タレ子コ

芭蕉

の影響を見いだすこともできる。

野水が「詩あきんど」歌仙を読んでいた形跡は『冬の日』

の次の表現にも見いだすことができる。

三ツ月の東は暗く鐘の声

芭蕉

秋湖アキウミかすかに琴かへす者

野水

(「つゝみかねて」歌仙)

これは「詩あきんど」歌仙の首尾に繰り返される次の表現を

踏まえたものと推測される。

詩あきんど年を貪サカサ酒債哉

其角

冬湖フユウミ日暮て駕カ興キョウ吟

芭蕉

(発句・脇)

詩あきんど花を貪サカサ酒債哉

(其)角

春湖ハルウミ日暮て駕カ興キョウ吟

(芭)蕉

(名残の花・揚句)

以上の例に徴するに、「唐萱」の句を詠む際、新風への想

いを詠んだ先の応酬(「芭蕉あるじの…/腐クサたる…」)が野

水の脳裏をよぎったと推測しても、さほどのを外してはいないように感じられる。其角・芭蕉という蕉門を代表する詩人が応酬した同歌仙は『みなしぐり』の中でも特に強い印象を残したものと推測されるのである。あるいは、野水の詩囊には、腐った草鞋の破れ目から苜が生え出るさまを詠んだ「沢苜ヂヂやくされ草鞋のちぎれより 杉風」（延宝八年跋「常盤屋之句合」第四番右）なども貯えられていたであらうか。「唐苜」の句とこの句との間には発想・表現の面で類似した部分も見受けられる。

いずれにせよ、この句は従来言われているように単なる叙景句としてではなく、蕉門の過去の作品を踏まえながら、俳諧革新に向かう芭蕉の孤影を「唐苜」に託して詠んだ、象徴的な一句として解釈すべきではないか。

注

- (1) 引用は『新編芭蕉大成』（三省堂 平11）による。ただし、表記を底本の形に改め、平仮名代わりに用いたカタカナはすべて平仮名に改めた。以下、特に断つたもの以外、芭蕉の発句、ならびに芭蕉が一座した連句の引用は同じとする。
- (2) 引用は『詳釋芭蕉七部集』（中央公論社 昭31）による。
- (3) 『俳文学大辞典』（角川書店 平7、大畑健治氏稿）
- (4) 『連句辞典』（東京堂書店 昭61）

- (5) 岩波セミナーブックス『芭蕉七部集』（岩波書店 平4）
- (6) 引用は古典俳文学大系『談林俳諧集（一）』（集英社 昭46）による。

- (7) 引用は古典俳文学大系『談林俳諧集（二）』（集英社 昭46）による。

- (8) 注（6）に同じ。ただし、句意を取りやすくするため脇に漢字の表記を補った。

- (9) 引用は『校本芭蕉全集』第七卷（富士見書房 平元）による。

- (10) 『俳文学大辞典』（前掲）によれば、「句付」とは「前句の表現や、そのいうところから感じられる余情・風趣に調和し、映発するように付句を付ける方法」（広田二郎氏稿）とされる。

- (11) ただし、先述したように、bとdを共に「場」の句と取る」と「観音開き」になってしまふ。『連句抄』第三篇（前掲）はそれを回避するため、『冬の日注解』（前掲）の「場の論に至りては、打越の宗祇水はたゞ盗人の松に対して噂の句なれば、此唐苜に其論はあるまじくや」という見解を援用し、「打越は前句に対して、その場という程緊密に解する必要はない」とするが、十分に説明がなされているとはいえない。

- (12) 『角川古語大辞典』第三卷（角川書店 昭62）によれば、「宗祇の蚊帳」とは「諸国修行中の宗祇と同じ蚊帳で寝たことがある」といつて自慢する輩を諷した語。江戸初期から元禄（二六八—一七〇四）ごろまで、うそをついてみえを張ることをいうことわざとして行われた」とのこと。

古典俳文学大系『談林俳諧集（一）』（二）（前掲）から「宗祇」を詠んだ句を拾い上げれば次のようになる。
・ 忍び逢よるは宗祇の蚊屋釣て

古今の大事伝へられけん

松山玖也

(延宝六年刊『物種集』)

・花に下戸宗祇の蚊屋のたとへ有

露沾

(延宝七年奥『江戸蛇之鮓』)

前者は男女が一つ蚊帳の中に同衾するさまを、秘かに古今伝授でもするのかと茶化したものであるし、後者は花見の宴に下戸が見栄を張って同席するさまを「宗祇の蚊帳」の諺に掛けて詠んだもの。

「髭」の故事も次のように詠まれている。

・はなたちばなむかしの人や宗祇の髭 心色

(延宝七年奥『江戸蛇之鮓』)

・夕枕宗祇風をかたしくや
匂ひをなづる青苔の髭

一礼

(延宝八年刊『投盆』第二)

これ以外にも旅の途中で連歌の興行に引かれるさまを詠んだ、

・お宿をかりて一会興行

西花

途中より宗祇を同道申たり

梅翁

(延宝四年序『天満千句』第六)

や、宗祇の代表作『湯山両吟』『湯山三吟』に掛け合わせた、

・湯の山や花の下枝のかけ作り

一朝

宗祇その外うぐひすの声

正友

(延宝三年跋『談林百韻』「青がらし」百韻)

などの作例が見られるが、時雨と取り合わせた用例は見受けられない。

高津忠夫氏(『連歌師宗祇』岩波書店 平成13)は幽山の

『誹枕』(延宝八年刊)に

駿東郡桃園定輪寺といふ所に宗祇法師の古墳あり。其由緒、かの終焉記に委く見えたり。

過し秋尋入侍りて、連式の徳名の高き事を思ひて

筆の虫名の虫又あり草の陰

幽山

又かの自畫自讃に

うつしをくは我かげながら世のうさも

しらぬ翁ぞうらやまれける

連歌

世にふるはさらに時雨の宿り哉

とあることを根拠に、「世にふるは」の句が「宗祇終焉記」もしくは面賛によって俳諧師の間に広まったものと推測する。芭蕉は若き日に幽山の執筆を務めたことされるが、やはり同じ経路で宗祇の句に接したものであろうか。

さらに氏は宗祇の句を踏まえた作例として「宗因千句」

(寛文十二年刊)の「古句のことばずしかへしつつ／世にふるは更に時雨の雨合羽」という付合を紹介する。管見では他

にも「世にふるも」僕やすし「時雨」(寛文十二年奥『時勢粧』)、「世にふるも身をすす麦のやどり哉」(享保二十年刊

『誹諧句選』)などの作例を見出すことができる。右から宗祇

の句がある程度人口に膾炙していたことが推測されるが、それ

ららはいずれも単なる文句取りにとどまっており、芭蕉の句

のように句中に「宗祇」の名を裁き入れ、その人生を「時

雨」に託して表現したものではない。

なお、古人の名の詠み方に関して、佐藤勝明氏に「古人

の名」の詠み方―芭蕉句「世にふるも」の意図をめぐって―

(『連歌俳諧研究』第百十一号、平18・9)なる論考が備わる。

(13) 新大系(前掲)も「前句を別の物に見立て」た句と解釈す

る。

(14) 新日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』(前掲、以下「新全

集」と略称)は「幼童のとりどりの姿を蓮のさまざまに姿態

になぞらえたように「みえる」と解し、新大系(前掲)も同じように「前句の芥子頭・坊主頭の一团を、それは、池の面の蓮の実のことかと見立てた」ものと解している。

(15) 新大系(前掲)も「旧冬の名残の水を踏み分けて狩に出かける」さまを詠んだものと解している。前句を依然としてその場の景とする解釈(旧大系・前掲)も見られるが、ここは前句の「いなづま」を「初狩人」に見立て替え、「景」から離れた方が展開はより大きくなるであろう。

(16) 引用は『和漢三才圖會』(東京美術 平4)による。ただし、書き下し文に改めた。

(17) 該当する歌仙の前書と発句は次のとおり。

憂テハ方ニ知リ酒ノ聖ヲ

貧シテハ始テ覺ル錢ノ神ヲ

A 花にうき世我酒白く食黒し

酒債尋常任々有

人一生七十古來稀

B 詩あきんど年を貪ル酒債哉

一年三百六十日

開ラレ口ヲ笑フコト無レ三日

C 飽やことし心と白の轟と

李下

Aは白楽天「江南謫居十韻」、Bは杜甫「曲江」、そしてCは施員吾「春遊」の一節をそれぞれ前書として引用したもの。「連句抄」第三篇(前掲)に教示を得た。

(18) 芭蕉はこの時期、他にも「ほと、ぎす今は俳諧師なき世哉」(天和年中作、寛政二年序「かしま紀行附録」所収)と俳壇の現状を嘆いた句を残している。新潮日本古典集成『芭蕉句集』(新潮社 昭57、今榮藏氏稿)はこの句を「時鳥の声の素晴らしさに圧倒されて、世の俳諧師は口をつぐみ、句

も出ない有様。まさにこの季節は、世の中に俳諧師がいないも同然だわい」と解しているが、ここは新全集(前掲)の「俳諧師による俳諧師らしい新しい作風が生まれてこないことに対する、いら立ちのようなものが感じられる慨世の句」とする解釈に従いたい。

(20) 新全集(前掲)も「むろん、秀句の聖は、挨拶として芭蕉をさしてもいなのであり、『冬の日』五歌仙の巻頭における狂句の才士——竹齋にも似た木枯らしの身、といった風狂の姿勢をとる芭蕉の自画像に対応させているのであろう」と解釈する。

(21) 引用は架蔵本による。ただし、濁点・読点を任意に補った。

(22) 引用は注(9)に同じ。

(23) 阿部正美氏は『連句抄』第三篇(前掲)で「この所ずつと人事句が続いたので、純粹な景の句を以て転換をはかつてゐる」と記している。

(ほんま まさゆき 成城学園中学校高等学校教諭)